

木洩れ日に 愛されに行く

わたしは、ほんとうの豊かさを知っている。たとえば夏の陽炎を、バックミラー越しに追いやりながら高原に向かう。ラゲッジには、ランチにちょうど良いサイズのテーブルと、ディナーを彩るランタンもある。しかしそれにもまして森の木々たちが作る木洩れ日は、極上のラゲジュアリーだ。いやサンクチュアリーと呼んでもいい。

それを心から愉しむには、わたしたちはささやかであるのが良い。森に気づかれないように近づく。鳥や小動物にその気配さえ感じとられないように静かにクルマを停める。緑の葉を大きく広げた木々が覆いかぶさる、夏の陽差しが遮られ、美しい風が頬を撫でる。

あ、これほど豊かだと感じられる一瞬がどれほどあるというのだ。ほんとうの豊かさとは、木洩れ日に静かに愛されることだ。

それを、わたしは伝えたい。 アピオジムニー

